

# 東京バッハ合唱団 月報

[ 第 511 号 ] 2005 年 1 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky3Web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.511

January 2005

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

「マタイ受難曲」における、群の役割 (4)

## 新年は恋唄から始まる 15 曲のコラール 上

大村 恵美子

《マタイ受難曲》のテーマソング „O Haupt voll Blut“

思うに、音楽史上にエヴェレストの最高峰のごとき孤高をもって聳え立つバッハの《マタイ受難曲》は、当時世に愛唱されていた、この „O Haupt voll Blut (おお 主の御頭血におおわれ)“ のコラールを、彼が一貫した主題歌として全曲にわたってとり入れるという発想に至ったときに、開花した。

私は、《マタイ受難曲》についての連続解説が、独唱部分から始まって、いよいよ合唱曲にさしかかった現段階で、さしせまった要求にかられていた。前号 (第 510 号、2004 年 12 月号) で、「《マタイ受難曲》から《クリスマス・オラトリオ》へ」の考案時からすでに、今すぐにも、このコラールのオリジナルとされる、ハンス・レオ・ハスラーの世俗歌曲をつきとめなければ、と思っていたのである。もう音楽史に接して何十年と、ただハスラー原作の恋愛歌とだけ紹介されて、一度もその歌詞の内容を知ることがないままに、今日にいたった。どこをどう調べれば、ゆきつくだろうか。もう待つわけにはゆかない。

そんな折りに、他の用事で杉山好先生にお電話した機会に、このことをお話しした。すると折り返し、お調べくださった経過と 5 節のドイツ語歌詞が届いた (3 頁参照)。

「ぼくの胸の想いは千々に乱れる」

ハスラー作曲、16 世紀から伝わった作詞者不詳の恋愛歌 „Mein Gmüt ist mir verwirret“ が、「死と永遠」のジャンルに入っているコラール „Herzlich tut mich verlangen“ に、上のメロディーが付けられて教会歌として登場したのは、1613 年に Görlitz で出版された聖歌集《Harmoniae sacrae, Vario Carminum Latinorum, etc.》が初出のようです。

ハスラーの歌曲集《Lustgarten Neuer Teutscher Gesänge》(Nürnberg 1601) 中の第 24 曲として発表された世俗の失恋の歌の歌詞全 5 節は、以下のとおりです。なおこの純情な青年の心を懊悩と悲歎のなかにつき落としした相手のおとめの名は、各節冒頭の一字ずつを拾っていくと、**MARIA** となります。

なお、この出典は、《Deutscher Lieder - Texte u. Melodien》Bd.I, S.277, Frankfurt a. M. 1980 (Ernst Klusen 編 2 巻本・Insel Verlag 刊) です。

つまり、この „Mein Gmüt ist mir verwirret“ が、《マタイ受難曲》の発端なのである。

1. „Mein Gmüt ist mir verwirret“ というハスラー作曲の歌

曲が、1601 年に発表されて以来、世に愛唱されるようになった。

2. それが教会コラール集にも、イエスの死、永遠の待望の歌 „Herzlich tut mich verlangen“ として変貌した聖歌となつてとり入れられ、またこれも広く愛唱されるようになった (EKQ 教会コラール集 #483 では、„Herzlich tut mich verlangen“ (Christoph Knoll 1599), Hans Leo Hassler 1601 / Geistlich Brieg um 1605) となっている)。
3. その後 50 余年もたつて、1656 年に P. ゲルハルトが、このハスラーの旋律に „O Haupt voll Blut und Wunden“ という受難を内容とした詩をつけて、これがいっそう人々の心をつかみ、受難のコラールを代表するような存在となった。
4. バッハがこのゲルハルトのコラールを《マタイ受難曲》に主題歌として採用 (1727 年初演) これを受難音楽の決定打となった。
5. その成功にひきつづき、バッハは信仰による神学的・音楽的深化を進めていって、7 年後には神の子の生誕を物語る《クリスマス・オラトリオ》の最初と最後の合唱枠として、生の待望・生の凱旋に装われた „O Haupt voll Blut“ の旋律を、掲げたのだった (1734 年初演)。キリスト教は、死後の安泰をではなく、生の充実をもたらす信仰であることを、バッハが終生の音楽行為をもってあざやかに指し示したものである。

これが、私の、一コラールの変遷をかえりみた結論である。

訳詞が 2 つに

世俗的恋愛歌の原詩を教えていただいた私は、さっそく逐語・口語体で訳してみた。そして、杉山先生にお送りした。ほんとうはこの際に、杉山先生のお話をいただきたいのだが、自分の関心にはやって、先生までおさわがせしてはならないと自戒しながら。

ところがまた、杉山先生も興に乗ってくださり、折り返しつぎようなコメントとともに、ついにご自身の訳詞まで実現されたのである。

ご苦心の訳を拝見しました。

以下に、貴訳を参照の上、小生のとりあえずの試訳を行なってみましたので、お目にかけます。これをあなたの手でいま一度推敲して頂いてから、月報に載せられたらいかがでしょうか。なお、これは内容から判る

とおり、純情な若者の恋の情熱と（それも片思い的）  
応えてもらえない失望と挫折（自信喪失）という屈折  
した情念の表白ととらえる方が適当ではないかと思考  
いたします。

（杉山 好 先生への返信：

さっそくのご翻訳ありがとうございました。先生の訳詞  
を引き出せて、結果的にすばらしい大企画となりました。

考えてみると、先生の少し高踏的な文語訳に親しんでい  
る私たち一般が、まるで数十年前の初々しい文学青年の生  
の心のうちをのぞきこんだような、口語訳のこの詩を、と  
ても珍しく貴重なものに受けとるにちがいないと思われ、  
私のとつきませようとしても、およそタイプが違いますの  
で、ここは男女熟年どうしの恋愛詩合戦とゆきますか、と  
いう出来心になり、私のも手直しさせていただいて、原詩  
杉山訳 大村訳と3つを併記することにしました。

1月号は、《マタイ》のコラール全曲の解説をと考えてい  
ましたが、思わぬ特別企画が飛びこんで、とんだ若返りの  
新年号となるでしょう。今になって、長年懸案だったハス  
ラー原詩の訳にこの世で出くわすなんて、人生いくら長く  
ても、まったく楽しいものです。

どうぞ、とりわけすばらしいクリスマスと新年をお迎え  
くださいますように！ 今回の一事が、杉山先生から私への  
最大のクリスマスプレゼントです。）

#### 愛の奥深い真実

バツハがこの旋律を愛したのは、それが、内容の変遷（世  
俗的恋愛 イエスへの愛 イエスの受難 神との共生の讃  
美・凱歌）にもかかわらず、人間の愛のいちずさ、純粹さ、  
デリケートさ、はげしさ、情熱、自と他との出会いの神秘  
さ等を、幅ひろく、底深く包容しているからではないのか。  
ハスラーに発し、民衆からバツハへと浸透していった人間  
の真実は、天地創造を舞台とし、また演目とする、神の人  
間への介入・共生、すなわちわれわれが 愛 として究極  
視する価値の、全身全霊をもつての肯定にほかならない。  
私はそういう立場から、いわゆる 世俗的な 愛にも、ア  
ガペー的な 愛にも、それぞれに気高く奥深い真実を認め  
るのである。

私はとりわけ、神の側にも、人間の側にも、愛のデリケ  
ートさを尊ぶ。若い男女の愛のみが、ノーマルなのではな  
い。むしろ私は、これだけ生きてきて、いちばん切実な愛  
を体験したのは、学齢前の男児の、成人した私への思慕を  
みつめたときだった。これは発熱して何日も起きられない  
ほど強いものだったが、残念ながら当時の私の側には、そ  
れに互角に応じるほどの純粹さに欠けていた。しかし、年  
齢、立場をこえてこれほどの他者への傾倒を注ぎだす、人  
間の存在の尊さを、すべての愛の原点として、深く学んだ  
のである。このように神は人を愛し求め、人は神を、また  
人を、愛し求める。ひたすら誠実に。

（ 蛇足かもしれませんが、この詩の主人公は、まだ失恋し  
たわけではなく、自分が相手の視野に入っていない段階での  
懊悩・不安・期待ではないかと私は見るのですが、いかがで  
しょうか。そんな気持ちを残して私は訳したのです。）

ひとりの たおやかな 乙女の せいで

訳：大村 恵美子

ひとりの たおやかな 乙女の せいで

わたしの心は 混乱し  
いたく 病み果てる  
大きな 歎きに 休みなく  
夜も 昼も さいなまれ  
溜息 涙に くれて  
悲しみのうちに  
はや 沈みゆく

ああ いったい 何のせいなの

そのような 歎きに  
なぜ 落ち込んでいるのと 彼女が きいてくれるなら  
わたしは はっきりと 答えたい  
こんなにも いたく わたしが 傷ついているのは  
ひとえに あなた自身のせいなのだと  
それで 少しでも あの人の心が 和らぐなら  
私の心も もういちど すこやかに なれようものを

ゆたかに 彼女は

美德で 装われ  
その 慎ましく 典雅な ものごし  
あの人に かなう者は 多くあるまい  
他の 優雅な 乙女たちのなかで  
彼女は いつも きわだっている  
それを見ると わたしは  
まるで 天国にでも いるようだ

わたしは 満足に 語ることも できない

彼女の そなえている 多くの 美と徳を  
何よりも わたしが ねがうこと  
それは 彼女が  
その 心と 愛を いつも わたしに  
向けようと 思ってくれ  
それで わたしの 悩み 苦しみが  
大きな 喜びに とって代わられるなら と

でも 諦めなければならぬ

そして ずっと 悲しいままに 過ごすのだ  
命を ちぢめてしまおうとも  
わたしの 一番の 耐えがたさは  
わたしが 彼女には おもしろくなくて  
無視されることだ  
どうか 神が この悩みより 守り  
防いでくださるように その 気高い み力によって

„Mein Gmüt ist mir verwirret“ 34

Mein Gmüt ist mir verwirret,  
das macht ein Jungfrau zart;  
Bin ganz und gar verwirret,  
mein Herz das kränkt sich hart.  
Hab Tag und Nacht kein Ruh,  
führ allzeit große Klag,  
tu stets seufzen und weinen,  
in Trauren schier verzag.

Ach, daß sie mich tät fragen,  
was doch die Ursach sei,  
warum ich führ solch Klagen  
ich wollt ihr's sagen frei,  
daß sie allein die ist,  
die mich so sehr verwundet:  
Könnt ich ihr Herz erweichen,  
würd ich bald wieder gesund.

Reichlich ist sie gezieret  
mit schön'n Tugend ohn Ziel;  
höflich wie sich gebühret,  
ihres Gleichen ist nicht viel.  
Für andern Jungfrau zart  
führt sie allzeit den Preis;  
wann ichs anschau, vermeine  
ich sei im Paradeis.

Ich kann nicht genug erzählen  
ihr Schön und Tugend viel;  
für Alle wollt ichs erwählen,  
wär es nur auch ihr Will,  
daß sie ihr Herz und Lieb  
gegn mir wendet allzeit,  
so würd mein Schmerz und Klagen  
verkehrt in große Freud.

Aber ich muß aufgeben  
und allzeit traurig sein,  
sollt mir gleich kosten's Leben:  
Das ist mein größte Pein,  
denn ich bin ihr zu schlecht,  
darum sie mein nicht acht.  
Gott wölls für Leid bewahren  
Durch sein göttliche Macht!

ぼくの胸の想いは千々に乱れる

訳：杉山 好

ぼくの胸の想いは千々に乱れる。  
それはひとりの見目うるわしい乙女のせい。  
身の置き場のない戸惑いと絶望、  
ぼくの心に負った痛手はあまりに酷(きび)しい。  
昼も夜も心安まるときとてなく、  
いつも大きな歎きを引きずって、  
出るのは溜息と涙ばかり、  
悲しみに打ちひしがれんばかりのこの身は。

ああ、せめて彼女がぼくに声をかけて、  
いったい何のせいで  
そんな歎きのとりこになってしまったの、と聞いてくれたなら、  
ぼくはズバリ彼女に言ってやりたい、  
ぼくをこんなひどい目に会わせたのは、  
ほかでもない、貴女自身なのだ、と。  
それで彼女の心がいくらかでも優しさを取り戻してくれるのなら、  
ぼくの心の傷もやがて癒されようものを。

豊かに彼女の身を飾る装いは、  
奥ゆかしい美德のそれ。  
慎みに包まれた優雅なものごし、  
あの人にかなう者として多くはあるまい。  
ほかの見目うるわしい乙女たちの中で  
あの人はいつでも群を抜いて輝く女王さま。  
その光景を目のあたりにするときのぼくは、  
それこそ天にもものぼる夢見ごち。

ぼくがどんなにことばを尽くしても、申し分のない  
才色兼備のあの人すばらしさは、とても伝えきれはしない。  
だれに目もくれず、まっしぐらにこの宝玉を選び取れるものなら。  
あの人さえその気になって、  
彼女のまごころと愛情を  
ぼくに向けていつも注いでくれるのだったら、  
ぼくの悩み苦しみは、  
大きな喜びにとって代われようものを。

けれどぼくは諦めて、  
いつも悲しみといっしょに生きてゆかねばならぬ。  
たとえそれでこの命をちぢめることになろうとも。  
わが身にとってこの上なくつらい不運、  
それはこのぼくがあの人には何の取柄もない存在で、  
見向きさえしてくれないことなのだ。  
神よ、願わくばわが身を耐えきれぬ悩みより守りたまえ、  
人の思いを越えるそのみ力によって！

## 第 96 回定演を終えての雑感

戸川 武志(団員:バス)

演奏会の終わったあと、出来はどうだったのかは一応気になるところです。しかし演奏している側からは全体が分かりませんので、客席の感想を聞くか後で録音を聞くかするほかありません。ただ大変単純、大雑把な言い方をすれば、演奏を気持ちよく楽しんでやれたときはいい演奏になっているのではないかと推測します。聞く立場で言った場合も、深い感銘を与えられたようなときは細かい技術的なことはどこかにすっ飛んでしまって、良かったという満足感、幸せ感のみ残ります。私は入団して約 2 年半、年末の定演は 3 回目になります。私の 1 回目は《マニフィカト》、2 年目は《クリスマス・オラトリオ》後半、今回は前半ということで、私にはそのどれもが初めての曲となりました。いつもなかなか思うように行かず、自分としては不満が残ります。自分でうまく行かないと思うところをできるだけ減らしていく、練習はいつもそんなことの連続で、当然ながらなかなか余裕は生まれません。ともかく気持ちよく、楽しんで歌えることができるように練習に励むほかないと思うのみです。

それで、今回の演奏会ではどうだったのか。自分自身のことと言えばやはり悔いが残る点多々ありますが、楽しかったという気持ちと相半ばです。聴いた方の感想で耳にしたのは限られたものではあります。バランスが良かった、女声が綺麗だった、感動してとてもよかったので次回も是非聞きたい、と嬉しいものもありました。定演後の打上げ会でソプラノの方が「気持ちよく歌えた」と申されていましたが聴衆にも反映したのでしょうか。「テナーは人数少ないのに頑張っていた」との発言も、バランスが良かったとの感想に繋がっていると思いました。打上げ会で大村先生が「カンタータ第 72 番は CD にして大丈夫」と言われたのを今回の演奏会の出来に関する嬉しい総括と受け止めました。

この打上げ会ですが、たんに感想の交換だけでなく、大村先生が成し遂げられた、バッハの全教会カンタータの日本語への翻訳完成と『バッハ・カンタータ 50 曲選』の出版完結のお祝い、さらに橋本さんが副指揮者として大曲を指揮されたお祝いを兼ねて行われたもので、とても有意義な会となりました。思うにこの 2 つのことは、東京バッハ合唱団の歴史上、たいへん大きな意味をもつ慶事ではないでしょうか。

大村先生の日本語訳完成については誰もが先生のご熱意、ご努力に驚嘆と感謝を捧げているところですが、その偉業の大きさについては、入団して日の浅い私の言葉では表しきれないものがあると痛感しております。ただ言えることは、いつの日か日本語で、しかもバッハ音楽を殺すことなく、カンタータや受難曲が歌われるようになることを記者一同念じてやまない(シュヴァイツァーの『バッハ』の訳者のひとり内垣啓三氏の、著作集第 13 巻あとがき)のくだりを『東京バッハ合唱団 30 年の歴史』の中に見出したとき、内垣氏等記者一同が 50 年ほど前に念じたことが今実現されている、と感動したことです。バッハに直接触れて理解を深めたいというたいへん単純、浅薄な理由で東京バ

ハに入った私ですが、バッハのカンタータに日を追って惹かれるようになりました。それぞれの曲が魅力的でありませんが、03 年 5 月、佐々木まり子先生が歌われた第 30 番第 5 曲のアリア 来たれ アダム末なる民 を伺ったときは、急速にバッハに引き寄せられた思いでした。思うに美しい日本語訳で理解や味わいが深められたお蔭と受け止めています。『50 曲選』が完成したことで、日本での日本語バッハの広がりの基礎ができました。その広がりの実現が着実に進むことを願っています。

橋本眞行さんには、5 月の第 95 回定演で前半のステージを指揮願ひ、今回第 96 回の定演では《クリスマス・オラトリオ》を指揮していただき、成功を収めました。指揮者については 1979 年以来大村先生一人でしたから、副指揮者を擁したことは大きな変革といえます。すべては大村先生の長期計画のうちにあります。日本語カンタータの訳出完成と同様、これからの発展の条件が整ったと見てよいことなのではないでしょうか。

私が入団したところ、2007 年で活動を止めるか、2008 年以降の活動はどうするかとの議論がありました。草創、試練、展開...と歴史を重ねてきて、もはや収束期に入っているのかと新人の私は戸惑い、寂しい気がしました。でもこれは一時の議論、検討であって結局は前向きな結論となり、収束期は私の杞憂となりました。現在、団員の大部分の方は仕事をもち、責任も抱えるなか、よくこの合唱団の活動を立派にされているとこれは本当に驚きです。高齢になるほど仕事のウェイトが高まる方も中にはおられるかもしれませんが、あるピークを過ぎれば、仕事、子育て、介護等のウェイトは減っていくのが一般的ではないでしょうか。若い人の入団はもちろん大歓迎ですが、現在おられる方々の時間的制約が時の経過とともに軽減され、さらに活発な活動がなされるようになることを期待し、念願しております。

## 定期演奏会とクリスマス会に出席して

黒田 みつ子(団員:ソプラノ)

新年あけましておめでとうございます。皆様お元気に 2005 年をお迎えのことと存じます。

昨年末、第 96 回定演に私は再度参加させていただきました。10 月初めの練習に目白に伺ったときには、自分の体力にいささか不安があったのですが、せっかく大村先生が「どうぞ」と受け入れてくださったのだから、もしも実現できればこんなに嬉しいことはないと思っておりました。ただ途中で挫折したり、ご迷惑にならないように、と願っておりました。

いつもながら団員の皆様の、温かくお優しいアドヴァイスをいただき、無事最後まで歌い終えることができました。心から感謝いたしております。とくにソプラノ・パートリーダーの片岡様や、荒井様には、演奏中の立ったり座ったりする箇所、唯一ソプラノだけが座ってはいけないうところで、ゲネプロで私は失敗してしまいましたが、本番では無事通過することができ、私はもちろん周りの方々もちょっとホッとされたことと思います。何でもない些細なことですが、緊張も手伝って思わずつられてしまいがちで

す。お世話になりました。

12日の公演終了後の打上げには、同級生の中澤富士子様（後援会員）も一緒に先生方と同じテーブルを囲み、東京でのオラトリオ初指揮の橋本眞行先生のご感想や、聴いてくださった応援の方々のお話に楽しいひと時を過ごしました。

翌13日の恒例のクリスマス会も、男声の方々の熱心にリソングを剥かれる手つきが微笑ましく、終始東京バツハ合唱団ならではの家庭的ムードで締めくくりも終了いたしました。

自然現象も犯罪も驚かされる災いの多かった昨年を忘れて、2005年は平和と幸福に満ちた年となりますように祈りつつ。

第96回定期演奏会 / 2004年12月12日 / 石橋メモリアルホール

### 会場アンケートより

多くの感想とご意見・ご要望、ありがとうございました。  
代表的な声をご紹介させていただき、次への励みとさせていただきます。

<全体>

- ・歌声とともにクリスマスが浮かび、意味が通りました。
- ・心がいやされ、神のみ言葉がしみ入る感じ。
- ・ところが洗われるようなクリスマス演奏会でした。
- ・心のこもった演奏。引きしまった堅実な演奏。
- ・半年でこれだけの完成度、すばらしいですね。年ごとにずっとレベルアップしていますね。
- ・ことにクリスマス・オラトリオ第3部は、ソリストも含め全演奏者の調子が出て、とてもよかった。

<歌詞>

- ・やわらかで温かい演奏会、言葉もよく届いていました。
- ・言葉もはっきり聴きとれ、とても楽しかった。
- ・大村訳の日本語の美しさと音楽との信仰の深さを、毎年のように感動させていただき、楽しませていただいて、感謝しています。
- ・久方ぶりのクリスマス・オラトリオで、たっぷり聴かせていただきました。この大曲をすべて大村訳の日本語で歌い聞くことができるのはすばらしいことで、詩語としては文語がぴったりしていることを、あらためて感じました。

コーラスと管弦楽の響きも相和してみごとでした。また次回に期待します。ありがとうございました。（森野善右衛門）

<独唱>

- ・それぞれに難曲をよくこなして、りっぱでした。
- ・ソプラノは、清らかな声で、よく伸びていて美しい。
- ・テノールは、とくに歌詞もはっきり聴き取れ、すばらしい。

<合唱>

- ・合唱がすばらしい。とりわけ中弱音の響きが良い。
- ・合唱とオーケストラとのバランスやテンポ感も絶妙でgood!
- ・第1部第1曲からワクワクします。合唱も今年はとくに引きしまっています。

- ・コーラルも重層的な透明感が感じられました。
- ・あらためてバツハの良さを感じました。すばらしい合唱を聞かせていただきありがとうございました。

<要望>

- ・テレビやFM放送にも出演してください。
- ・合唱団員のなかでイヤリング、ピアスをされていた。ゲスト以外はつけない方が良いのでは。
- ・日本語なのでわかり易い。今後も日本語をつづけてください。
- ・ドイツ語での演奏も聞いてみたい。
- ・できれば字幕を出して頂きたい（日本語でも聴き取れないので）、演奏中のページをめくる音で気が散ってしまう。

## 2005年演奏予定

○第97回定期演奏会「コーラル・カンタータ集」  
（2005年5月15日午後4時、石橋メモリアルホール）  
カンタータ第129番《ほめ讃えよ 主を》\*  
カンタータ第137番《ほめよ主を 強き栄えの君を》\*  
カンタータ第116番《平和の君 イェス》  
カンタータ第147番《心と日々のわざもて》  
（曲名右肩の[\*]は、橋本眞行氏の指揮を予定）

○世田谷中央教会演奏会（7月）  
カンタータ第137番（1.合唱 3.S/B 二重唱 5.コーラル）\*  
宗教歌曲第6番 愛するわが羊 いずこに迷いし（斉唱）  
カンタータ第85番《われは 善き牧人》（全曲）  
カンタータ第147番（1.合唱 10.コーラル）\*

○野尻湖演奏会（8月、A：佐々木まり子、P：内山亜希）  
カンタータ第54番《抗え いざ罪に》（A独唱）  
カンタータ第169番《神にのみ わが心献げん》（A独唱）  
カンタータ第85番（全曲）  
カンタータ第147番（1.合唱 10.コーラル）

○第98回定期演奏会（12月）  
カンタータ第123番《いとしインマヌエル》  
カンタータ第192番《ああ 感謝せん 神に》  
カンタータ第197番《主 かたき望み》  
その他にクリスマス用小曲（?）

<参考2006-2007年予定>

○第99回定期演奏会（2006年春）  
カンタータ第180番《よそおえ心よ 罪の闇を去り》  
カンタータ第187番《待ち望む みな なれを》  
カンタータ第194番《大いなるこの日 新たな宮を》

○第100回定期演奏会（2007年春）  
《マタイ受難曲》  
（第100回・創立45周年記念）

## 新著紹介

秋田 稔『パウロは私たちにとって誰なのか』(上)  
「ローマ人への手紙」に学ぶ (第1 8章)

大村 恵美子

合唱団の団友・後援会員・団員のなかには、多くの分野で立派なお働きをしておられる方々があり、主宰者である私にも、折りあるごとに、その成果をお分かちくださり、著書なども、発行とともに、つぎつぎにご恵贈くださることもたびたびです。

このクリスマスにも、長年ご著書その他いろいろな贈り物をいただいている杉山好先生から、ついにハスラーの「わが心は千々に乱れ」という詩の訳詞まで、異色のプレゼントをいただいたことは、この号の冒頭にお知らせしているとおりです。

もうひとつ、プレゼントの中から、ぜひご紹介したいと思うのは、秋田稔先生の御著書『パウロは私たちにとって誰なのか』(新教出版社)です。

秋田先生とは、私が恵泉女学園高校課外オーケストラの指導をしていたころに、園長として何度かお話し合いの機会を得、お目にかかることは少ないのに、先生がいらっしゃるというだけで、とても安心していられたことを思い出します。

その後、合唱団の団友になっていただいて、定期演奏会に何度もいらしてくださいました。また、私の知人の記念会、葬儀など、思いがけぬ会合でお会いすることが何度かあって、個人的にとっても身近く感じられるようになりました。

とりわけ、たいへん仲良しの御夫妻でいらしたのに、奥様を先に召され、その追悼の御本をいただいて、私は、どんなに厳しい試練に耐えられなければならないのだろう、と深く案じました。ところが、その後、先生は『イエスの生と死 マルコ福音書に学ぶ』上・下、『人間についてのギリシア的思惟とヘブライ的思惟叙説』、『人間形成のキリスト教的基礎』など、敢然とたてつづけに著作を世に出され、まるで奥様との共著のように、力強い日々を生きてこられたのです。この本のあとがきにも、このように記されています。「この書を勉強会発足の時のメンバーの一員であった秋田聖子に捧げます。発行日の12月2日は彼女の誕生日でした。」

この私にまでも、発行と同時に、御新著が届きました。秋田先生の文章は、良心的な学的裏づけとともに、内省的で押しつけがましくなく、人の心に暖かく入りこむような、わかり易さが感じられ、先生が長い年月(国際基督教大学、北星学園、恵泉女学園、山梨英和学院、津田塾大学、東京大学、御茶ノ水女子大学等で)若い学生たちを愛しながら諄々と説いてこられたことが、よく感じられます。

「内の人、外の人というとらえ方は、本来ギリシア哲学、グノーシス派の二元論的発想でのものであり、必ずしもパウロ独自のものではないでしょう。人間としての内なる分裂を経験したパウロが、豊富な彼のギリシア的思想の知識より自らの霊肉対立分裂の内的体験を言語化思想化するために、いわば借り物の言葉を、それぞれの箇所に応じて用いたと見てよいのでしょうか。私には、むしろパウロその

人が(ユダヤ人であっていかにもユダヤ的な、しかしユダヤ人の枠を越えた)ヘブライ的かつギリシア的(と表現してよい)人間であったというように思われるのです。」(221-222頁)

パウロの存在は、私にも難しく、福音書のイエスの言動に全面的についてゆきたい者に、あとから現われて無用有害なほどに理論武装をして人々からイエスを遠ざけ、ローマ帝国にキリスト教を結びつけることで、政治的に偏した方向に決定づけてしまったようにも思われ、現在のわれわれには、イエスの原点にまでたち戻って、信仰を、ピュアな地下水のように流れてきたものから辿りなおすしか、将来はないのではないかとさえ考えることもあるのですが、秋田先生の御著に学ぶときには、自分ながら素直に耳傾ける自分に気づきます。

本文のあと「附録」として、「聖書の思想の出発点(創世記第1-10章)」があり、これは聖書全体に対する考えをまとめるのにとっても貴重なものです。21世紀初頭に、誤った出発をしたこの世界は、しっかり一から出直す必要に迫られていると思います。

1943年、学徒出陣の直後、クリスマスイヴの真っ暗闇のなかで、不寝番でひとり立っていて経験されたという、秋田青年とともに、私たちもイエス生誕の夜の光を、今年も初心で迎えなおさなければと、つくづく感じました。

秋田先生、すばらしいプレゼントをありがとうございました。

## 『日本語演奏によるバッハ・カンタータ50曲選』

### CD選集 第3期発行の御案内

CD第3期の制作を進めています。今回発行の4枚は以下のとおり。発行は、2005年春を予定しています。

( )内の4桁数字で録音年次を示してみました。ご覧のとおり、多くは最近1、2年の最新録音ですが、第80番は1983年の音源、ソプラノ名古屋木実、アルト戸田敏子という懐かしい顔ぶれです。ご期待ください。

このシリーズ発表とともに、カンタータ日本語演奏の趣旨への支持層も広がりつつあります。さらなるご協力をよろしくお願いします。

近日中に詳細を確定し、予約受け付けを開始します。

#### [第5巻]

カンタータ第36番「喜びのぼれいと高き星に」(2001)  
カンタータ第39番「あたえよパンを 飢えたる者に」(1993)  
カンタータ第40番「地に来ませり 神のみ子」(2003)

#### [第10巻]

カンタータ第76番「主の栄光を 天は語り」(1989)  
カンタータ第77番「主を愛すべし 心のかぎり」(2004)

#### [第11巻]

カンタータ第78番「イエス わが心を」(2004)  
カンタータ第80番「かたき皆ぞ わが主は」(1983)

#### [第12巻]

カンタータ第84番「われ足れり わが幸に」(1999)  
カンタータ第93番「ただ主に よりたのみ」(2004)  
カンタータ第99番「神のみわざこそ ことごと善けれ」(2004)